

日本アナキズム運動人名事典編集委員会編
『日本アナキズム運動人名事典』

評者：梅田 俊英

本書は、大澤正道・小松隆治・鶴見俊輔氏ら26人を編集委員として作成された一大アナキズム運動辞典である。本書は「アナキスト人名事典」ではなく、「アナキズム運動人名事典」であることにまず注意しておきたい。つまり、アナキズム運動に直接かかわった人だけでなく、その周辺に存在した人々も広く収録されているのである。本書の特徴はまずここにある。本書をひとくと、最初にエスペラント語の序文が目につく。その点、いかにもアナキズム運動辞典だと好感が持てる。

本書には、アナキズム運動にかかわった人とその周辺の人が3000名収録されているという。かなり層の厚い運動だったと目を見張らせるものがある。平民社の運動から100年。その成果が現在実を結んでいるかと言えば、「残念ながらとてもそうは言えまい」（本書「まえがき」と評者も言わざるを得ない。周知のように、平民社の運動の大きな柱に「非戦論」があった。現在の情勢では、「非戦」とは対極的な動きがむしろ強くなっているとおおかたの人々は認識しているであろう。こういう中であって、本書が出版されたことに大きな意義を認めることができる。

従来の本格的な社会運動人名辞典の最初のものが『日本社会運動人名辞典』（青木書店、1979

年）だとは誰もが認めることである。この辞典が果たした役割の大きさには語り尽くせないものがある。伝聞によれば、この辞典に収録された旧活動家が親族一統に本書を配り、以て瞑するものがあると述懐したという。本書はまさに戦前の名もなき活動家を顕彰する働きをもしていたのである。

とはいえ、本書にも弱点があった。例えば、在日朝鮮人運動関係者や植民地下の活動家や知識人運動関係者がほとんど収録されていないことをあげることができる。また、各項目の文責が明らかでないこと、さらに深く調べるための関係文献の表記が手薄なことも弱点にあげることができる。

この中であって、97年には日外アソシエーツより『近代日本社会運動史人物大事典』（全4巻）が上記辞典の弱点を補う形で出版された。同書には在日朝鮮人の活動家や知識人運動関係者や運動の周辺の人々も含まれている。また、新稿も多く含まれていて、研究に大きな前進を与えるものであった。しかし、同事典は大きすぎて、いかんせん「見切り発車」の感を呈している。本書は膨大に集積された人名カードの作成の上で編集された。このカードが完成されないまま出版されたのである。そのため、戦後ある大学の教授となる戦前の活動家が「城西消費組合員」とだけ書かれていたりするのである。

実は、『日本アナキズム運動人名事典』の編纂は、上記日外版事典の97年4月の出版記念会からスタートしている。同記念会で配布された「会報」への批判が行われ、翌年11月の第10回コスモス忌（アナキズム詩人・秋山清を偲ぶ会）の席上での講演あとの質疑席上での鶴見発言「記述はよくない、改訂は期待できない、それより独自に事典を作られたらいい、それに私も加わる」（同志社大学人文科学研究所での北村信隆氏の報告レジュメ「『日本アナキズム運動人名事典』

の編輯にかかわって」04年5月28日)が発祥となったという。その後、「主要機関誌」や「身上調査」からの「人名索引」「項目表リスト」作成、執筆グループジャンル分け(「サンジカ関係」「文学、詩関係」「水平社関係」「初期社会主義・在米」「沖縄・中国・台湾」「ギロチン社」「演劇」など)が行われた。

なかでも、植民地など海外の活動家やアナキスト詩人などの芸術関係の人などに詳しい。秋山清、金子光晴らは当然立稿されている。さらに、『戦旗』を編集し、戦後共産党系の『詩人会議』の看板となっていた壺井繁治の若き頃、アナキスト詩人としての側面をしっかりと書き込んである。晩年の壺井には、自己がアナキスト詩人であった頃への郷愁は強く、1973年には金子光晴らと詩の同人を組んでいる(「うむまあ会」)。このような記述があってもよかったかもしれない。

最初に述べたように、本書には運動関係者まで豊富に収録されているところに一つの特徴がある。例えば、政友会衆議院議員を長くつとめた三申・小泉策太郎が幸徳秋水の墓の文字の筆記者であるとの記述などである。このようなところから、本書が「巨大な歴史の地下水脈を辿る」ものとなっていると言えよう(『週刊金曜日』04年6月18日付、井家上隆幸氏の書評)。大杉栄(浅羽通明『アナキズム』ちくま新書、2004年によると『広辞苑』には「無政府主義者」と定義されているのは大杉だけだという。幸徳秋水は「社会主義者」となっている)ほか狭義のアナキスト・アナキズム運動関係者は当然として、労働運動・水平運動などの諸社会運動家たちも広く収録されているのである。

このようなところから、本書の出版の歴史的

意義は大きなものがある。収録項目数にも申し分がない。これからの課題として、若干の意見を述べたい。記述の上で、アナ・ボルの分離の問題をどうとらえるのかという点がある。周知のように、アナ・ボル論争があり分裂していくのだが、それは中央のことで、各地域では様相が違っていた。例えば、青森ではアナ・ボル共同の抵抗事件(アナキスト・野呂衛入営見送りデモ事件『青森県労働運動史』第1巻所収「座談会」1969年)が起こっていたりするのである。また、柳瀬正夢も駆け出しの頃には「穴明共三」(もちろん、アナキー・共産)のペンネームを使っている。その彼を長谷川如是閑は芸術運動に励めと「けしかけて」いる。このような事項が、如是閑の項目に記述されているとよかったかなと思う。とはいえ、このようなことは「重箱の隅」のようなもので、本書のできばえのすばらしさに傷が付くものではないであろう。

最後に本書の使いやすさを指摘しておこう。まず言えることは、関係文献の豊富さである。例えば「特高月報」などのように、ほとんど各事項の出典が記載されている。そのため、事項の人物について再調査することが容易にできることとなっているわけである。また、「アナキズム運動史関連機関紙誌リスト一覧」には、アナキズム関連の紙誌一覧が同人誌までを含めて記載されており、目を見張るものがある。今後、記述内容がさらによくなっていくことを期待したい。

(日本アナキズム運動人名事典編集委員会編『日本アナキズム運動人名事典』ぱる出版、2004年4月刊、865頁、定価23,000円+税)

(うめだ・としひで 法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員)